

エージェンシーとインデックスの芸術論

加藤隆文（京都大学）

本発表では、「芸術の人類学」を提唱する人類学者 A・ジェルが著書 *ARTANDAGENCY*（一九九八年）で論じたエージェンシーという概念を参照することで、人間の芸術的行為への批判的な考察を試みる。また、ジェルはエージェンシーに関する理論を構築する際に、プラグマティズムの創始者 C・S・パースのインデックスという概念を参照している。実際のところ、ジェルの用いるインデックス概念はパースのそれに忠実であるとは言いがたい面もある。しかしながらジェルの理論は、同じくインデックスに言及し芸術学で盛んに参照される R・E・クラウスの「指標論」とは別様に、インデックス概念の可能性を示している。

ジェルの理論の概要は次の通りである。まずジェルは、インデックスの用法を限定する。彼の規定によると、「インデックスは、それ自体で、社会的エージェンシーの結果かつ／もしくは道具（the instrument）であると見なされる」。例えば、煙は火のインデックスであると言う際に、ジェルは、自然の因果的過程によって煙が火から生じている点には関心を向けない。むしろ彼が注目するのは、煙という結果が、人間の行為者（agent）の、例えば焼き畑のために火をつけるという社会的行為によってもたらされる点である。とはいえ、エージェンシーが帰属されるのは、実際に出来事を引き起こす人間には限らない。ジェルは、例えば、神々の偶像や自動車にもエージェンシーは宿ると考えている。つまり、因果的な連鎖を開始させる志向（intention）が宿っているならば、人間であれ物であれ、それはエージェンシーを持つとしている。こうした考えから、ジェルは、芸術作品などの人工物は時間的・空間的に複雑に絡まり合った志向の集合を具現化するものと見なし、これが社会的なエージェンシーの媒介であるとする。加えて彼は、人間あるいは人間の心にも、同様の構造を認め、次のように述べる。すなわち、「人間は、この個人やあの個人といった伝記的な存在のあり様を、存命中もそれ以降も証言する、諸インデックスの総計として理解される」。

特に発表者が注目するのは、*ARTANDAGENCY* の最終章の題名にもなっている「拡張した心」（The Extended Mind）という発想である。本書でジェルは、いわゆる心の哲学において 90 年代より盛んに提唱されている「拡張した心」を論じているわけではなく、彼の「拡張した心」はそれとは独立に理解すべきだが、他方で彼は、D・デネットが心の哲学をめぐって提起した諸議論、たとえばホムンクルスの議論などを盛んに参照し、自身の理論と接続している。本発表では、ジェルの提唱する「芸術の人類学」は、人間の諸社会における「拡張した心」を独自に探求している点で、心の哲学と、芸術的行為をめぐる哲学的考察への、重要な貢献を成し得るのではないかと述べたい。